

公益社団法人日本看護科学学会 (JANS) 英文誌 (JJNS) 編集委員長への公開質問状

2026年1月14日

名古屋市立大学大学院医学研究科 公衆衛生学分野・教授 鈴木貞夫

宛先：JJNS 編集委員長 グレッグ美鈴 先生,

BCC : JJNS 全編集委員 (Editorial Board Members) 各位,

件名：八重・椿論文（2019）に対する不透明な編集プロセス、および組織的隠蔽の疑義に関する公開質問

1. はじめに

本状は、貴誌 JJNS 掲載の八重・椿論文（2019年）に対する一連の編集判断が、国際的な出版倫理基準（COPE および ICMJE）に著しく反し、かつ組織的な隠蔽の疑いがあることについて、現編集委員長としての見解と事実関係の説明を求めるものです。

また、本状を全編集委員の皆さんに BCC として送付します。これは、JJNS の回答で「編集委員会の判断」として公表された内容が、虚偽である疑いが強く、委員の皆さんにもその責任とリスクを共有いただく必要があると判断したためです。

本状は公開質問状であり、この問題に関心のある研究者、医療従事者、公的機関、メディアなどに BCC を通じ共有しています。公開質問状であるため、本メールの転送、SNS への公開を妨げません。

2. 編集プロセスにおける重大な疑義（回答要求）

① 看護的内容を含まない「スコープ外論文」のスピード採択

グレッグ先生、あなたは長年 JJNS のプライマリースクリーニングを担当してきました。八重・椿論文は、看護の内容を一切含まない純然たる統計解析論文です。また、JJNS の Subject Editor (SE) が疫学、統計の専門家から、その分野の非専門家であり、所属の上司でもある委員に変更になったという、利益相反上の問題も指摘されています。本来ならエディターキックされるべきスコープ外論文が、SE の変更という事態を経て、わずか 70 日というスピードで採択されるのは極めて異例であり、採択過程についての利益相反も含めた疑義が出るのは当然です。

質問1：SE 変更の事実関係、事実であれば変更の理由について、納得のいく説明を求めます。

② 非公式な統計相談と「統計不正」の隠蔽

グレッグ先生、あなたは2019年当時、私の指摘の妥当性を確認するため、統計学の専門家に問い合わせをしました。その際、当該専門家から「八重・椿論文の分析が間違っている（鈴木氏の指摘通りである）」という明確な結論を得ていたはずです。しかし、先生はその事実を公式な編集プロセス（査読や撤回検討）に乗せるのではなく、当時の編集委員長に対し、「（専門家も）鈴木氏と同じ意見だった。この後どう処理するか悩ましい」という趣旨のメールを送り、統計不正の事実を闇に葬りました。これは学術誌の誠実性（Integrity）に対する重大な背信行為です。

質問2：「分析が間違っている」という専門家の結論を得ながら、その事実を公式記録に残さず、統計不正の事実を闇に葬ったのはなぜですか。編集委員長の指示ですか。

③ 「特別委員会」による編集の独立性の侵害

「JJNS Review Process」のフローチャートによると、出版されるものは、必ず査読を受けるシステムになっています。これは、査読なしで出版されることはないということを意味します。しかし、堀内編集委員長（当時）の説明では、撤回要請却下の判断は、理事会が組織した「特別委員会」の結論（2019年4月7日）に依拠しています。JJNS 内部での査読は受けておらず、JJNS の査読ルールに明確に反しています。学術誌の撤回判断は、編集委員会が独立して行うべきものです。外部委員会が査読プロセスを「事後承認」し、その結論が編集判断を拘束した事実は、ICMJE が定める「編集の独立性（Editorial Independence）」を明白に侵害しています。また、編集会議で「編集委員は理事会の決定に従うこと」という発言が繰り返しなされていることも確認されています。

質問3：理事会による深刻な「編集の独立性侵害」を、現編集委員長としてどう正当化されますか。

④ 公開文書（JJNS レター1）における虚偽記載と編集委員の責任

ホルツマー編集長による2019年8月の公式回答（JJNS レター1）には、「私（編集長）と編集委員会（editorial board）は、これらの問題が受理判断を変えるものとは思

わない」と記されています。しかし、実際には「特別委員会の結論」を追認しただけであり、編集委員会として実質的な審議や採決を行った形跡がありません。申し上げるまでもなく、論文撤回要請の取り扱いは編集委員会の専権事項であり、「特別委員会」で代替できるものではありません。また、そうであるからこそホルツマー編集長はこの言葉を使用したと考えられます。

質問4：実態がないにもかかわらず「編集委員会」という言葉を使い、編集委員を巻き込む形で、読者に対して虚偽の情報を提示した理由の説明を求める。

⑤ 査読プロセスの形骸化（品質保証の欠如）

八重・椿氏による著者回答レター1は、投稿からわずか10日で採択されています。私が提起した統計不正という深刻な懸念に対し、わずか10日間で、「JJNS Review Process」のフローチャートに準拠した、査読プロセスが完了したのでしょうか。質問者から見た著者回答レター1は、誠実に質問に答えたものではなく、査読がなされていないという疑義をもっています。

質問5：実態は、査読を行わずに単に「2レターを並べただけ」だったのではないかでしょうか。査読したのであれば、できる形で査読意見を公開してください。

⑥ 自身の掲げる「査読倫理」との致命的な乖離

グレッグ先生、あなたは自らのエッセイ（2022年）において、「査読によって論文は良くなる」「投稿者も査読者も対等の立場だ」と説き、投稿のありがたさを強調されています。しかし、科学的な疑義の投稿に対し、非公開の「1論文1レター」という不当なルールで封殺しています。また、2025年に私が投稿した3編のレターは、すべて査読に回ることなくエディターキックされました。2020年以降の新情報を根拠とした再撤回要請は、2019年の特別委員会の決定のみを根拠にエディターキックされています。

質問6：新たな投稿を、ことごとくエディターキックで排除する。このあなたの行動は、自らが説く「査読者と執筆者の対等なコラボレーション」という理想と、どのように両立するのですか。

⑦ シミュレーションによる「情報バイアス」の実証と学術的認定

私は、八重・椿論文が設定した「Study Period」が、統計学的な情報バイアス（系統誤差）を生じさせ、存在しない因果関係を創り出すということを、鈴木レター2のシミュレーションによって実証しました。この12月に、その疫学理論的な側面の研究成果が、日本公衆衛生雑誌に正式に採択され、学術的な認定を受けています。八重・椿論文の「統計不正」が他学会の専門誌によって学術的に証明された今、貴誌が「方法論の相違」という言葉で逃げ続けることは不可能です。

質問7：この新しいエビデンスに基き、COPEのガイドラインに従って、直ちに撤回判断を再考する意思はありますか。

3. その他の質問事項（回答要求）

現編集委員長として、さらに以下の質問について明確にご回答ください。

質問8（証拠の開示）：当時の編集委員会において、本件がどのように審議されたのかを証明する議事録、および鈴木レターと著者回答レターに対する「独立した専門家による査読報告書」は存在しますか。ある場合は開示可能ですか。

質問9（COPEガイドラインへの抵触）：誤りが明らかな「八重・椿論文」を、組織的な隠蔽工作によって維持し続けることは、COPEの撤回ガイドラインに明らかに違反します。この倫理的責任を、編集委員長としてどのように取るつもりですか。

回答に時間がかかるものはないため、1月23日までに、すべての回答を鈴木宛にお送りください。回答は全編集委員および関係者、関係機関、さらにメディアにも共有されるべきものであることを申し添えます。

以上

次ページは、ホームページからダウンロードした「JJNS Review Process」のフローチャートです。

JJNS Review Process (January 2016 updated)

